



2017 free

片足靴屋/Sheagh sidhe



こちらは片足靴屋/Sheagh sidheが2017年に発行した  
フリーなポストカードならびにフリーペーパー集です。

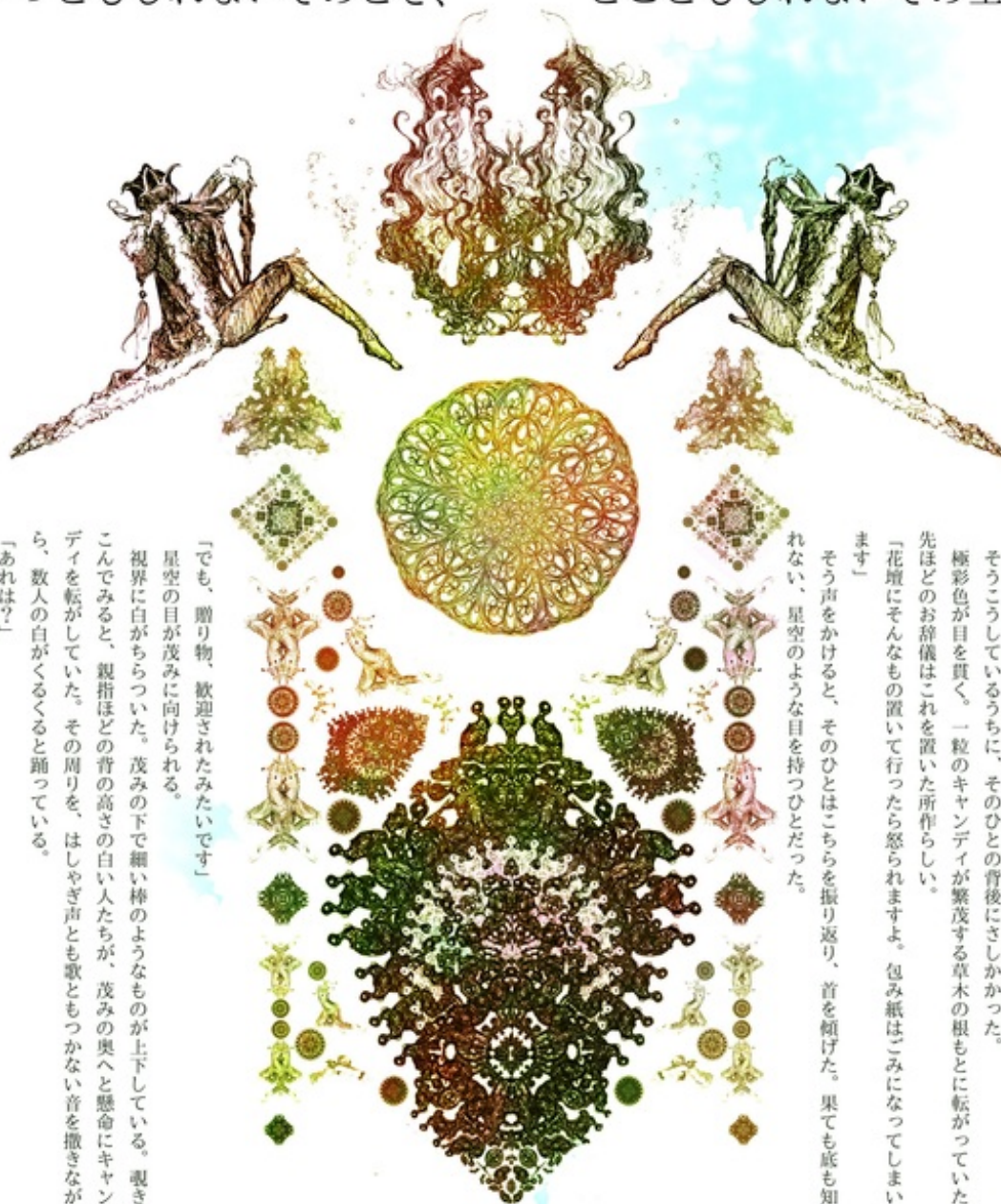
2017/12/10 南風野さきは

※著作権は著者に帰属いたします。

※※これらはフィクションであり、実在のあれそれには一切関係ありません。



いつともしれないそのとき、 どこともしれないその土地。



「でも、贈り物、歓迎されたみたいですよ」  
星空の目が茂みに向けられる。  
視界に白がちらついた。茂みの中で細い棒のようなものが上下している。覗きこんでみると、親指ほどの背の高さの白い人たちが、茂みの奥へと懸命にキャンデイを転がしていた。その周りを、はしやぎ声とも歌ともつかない音を撒きながら、数人の白がくるくると踊っている。  
「あれは？」  
疑問のぶつけ先を求めて振り返る。だが、そこにいたはずの星空の目の持ち主は、影も形も見当たらない。  
立ち去る気配も物音もなく、煙が極き消えるように、そこには誰もいなかった。

公園を散歩していると、花壇に向かってお辞儀をしているひとがいた。そこは公園の隅っこで、陽当りは悪く、人気もない。花壇とはいっても、崩れかけた煉瓦が埋もれかけていて、どうして手入れされないでいるのかが不思議なくらいに野の花が咲き誇っていた。いくら新緑の季節ではあるとはいえ、もはや花壇ではなく茂みだ。  
そうこうしているうちに、そのひとの背後にさしかかった。  
極彩色が目貫く。一粒のキャンデイが繁茂する草木の根もとに転がっていた。先ほどのお辞儀はこれを置いた所作らしい。  
「花壇にそんなもの置いて行ったら怒られますよ。包み紙はごみになってしまいます」  
そう声をかけると、そのひとはこちらを振り返り、首を傾げた。果ても底も知らない、星空のような目を持つひとだった。

あわいにたゆたう幻想物語群。

静岡文学マルシェ ポストカードギャザリング  
南風野さきは (片足靴屋/Sheagh sidhe)

twitter @SAKIHA\_HAENO or @K\_ss\_info(告知用)  
tumblr. <http://sakiha-haeno.tumblr.com/>  
HP <http://id12.fm-p.jp/20/LIR/>  
mail [sheaghsidhe@gmail.com](mailto:sheaghsidhe@gmail.com)

【既刊】

泡と消えない人魚がうたう<sup>あなたにくらげを</sup>  
幻想短編集part1『人魚のはなし』  
新書判/62P/¥400

祝祭をころがす道化が笑う<sup>養草の泉血に土冠を!</sup>  
幻想短編集part2『道化と偽王』  
新書判/66P/¥400





学校から帰ると、いつも、俺はそいつと遊んでいた。  
沢沿いの竹藪には一株だけ紫陽花が咲いていた。緑陰に映える紅がかった青色の花は、  
宵闇に集う蛍火のようだった。  
膝まで沢に浸かり、あでやかな紅の花の根を唇に食ませたそいつは、淡い緑の目で岩  
上の俺を見遣る。  
「あまいよ、蜜」  
「俺は花粉症なの」  
「お菓子は、おやつは、あまいものは、ささげられるこえそのものだ。総じて身勝手な  
ものだけれど、おいしく食べることができるのなら、それはお菓子になる」  
「何を言っている？」  
「人魚の肉は、あまいらしいよ」  
躑躅の花を啜えたまま、そいつは笑う。  
「だから、もしそれを見つけることができたのなら、ふたつに分けて、一緒に食べよう」



## 『おなじおかしを食べるということについて』

片足靴屋/Sheagh sihde No.F-20 南風野さきは



2017/10/28

第6回Text-Revolution内有志企画

第5回300字SSお菓子カードラリー

お題：お菓子





そこは緑陰だった。葉を落とした枝と常緑の針葉の影が融けあう暗かりに、淡い陽光が斑に揺れていた。そこは段差だった。崖と呼ぶほどではないけれど、飛び降りれば怪我することを覚悟しなければならぬくらいの高さと傾斜は持ち合わせていて、林の隅に位置していた。山から滲んだ水で潤んでいる黒い土の壁には、かろうじてかたちを保っている、紅葉の名残たる鮮やかさの抜け果てた落ち葉がはりついていた。そこは吹き溜まりだった。朽ちかけの落ち葉が濡れた艶を放ちながら積み重なっていた。その下がどうなっているのかはよくわからない。石が積み重ねられているのかもしれないし、何かが埋められているのかもしれないし、もしかすると空洞があるのかもしれない。

「そこにいるのでしょうか。でておいでよ」

地を覆う落ち葉の下へと声を落としてみたものの、返事はなかった。

君の得意なことが沈黙であることは知っている。君がさびしがりやであることも、知っている。

だから、僕はひとりで喋り続けた。

「君と目にしたいたいのが、たくさんあるんだ」

高く澄んだ音が、鈴鳴りよりも透きとおった音が、月影を纏った弦を爪弾いたかのような音が、足もと  
の土を突き抜いて湧きあがる。


「ほんとうに、君は素直ではない」

唇が笑みのかたちになっていくことを自覚する。

いなくなったりあらわれたりを、君は繰り返す。それでも、そんな空白などなかったかのように、僕は遊ぶのだ。

「ひとりに厭きたら僕のところにおいで。約束だからね」

宵闇にまばゆい爛漫と咲き誇る花を、はちきれんばかりに膨らむきらきらしい濃緑を、地を燃やさんと色づいた紅葉を、同じようではあっても一度として同じものなどないそれらを、それらが瞬くその度にもともにふたりで目にしよう。



## 『水琴窟』

片足靴屋/Sheagh sidhe 南風野さきは

<http://sakiha-haeno.tumblr.com/>

発行：2017/11/18-11/19

静岡文学マルシェ ポストカードギャザリング







2017/10/28 第6回Text-Revolutions  
片足靴屋/Sheagh sidhe [No. F-20]

<http://sakiha-haeno.tumblr.com/>  
<http://id12.fm-p.jp/20/L1R/>  
Twitter @k\_ss\_info



## かたどる

ぼくの家は森のなかであって、そのひとにとっては宝宝箱のようなものだった。ある時から、そのひとはぼくを飾りつけるようになった。腕にまとわりつく金鎖銀鎖を、宝石をちりばめた首飾りを、絹の長靴下を、鮮紅の口紅を、芳しい香水を、ありあまる装いをぼくに与えては、そのひとは首を傾げたり頷いたりしていた。

燭火にとろけた目をもって、そのひとはぼくを飾り、塗り固めていく。

そのひとがつくりたがっているものを、ぼくも知っている。だから、そのひとがつくろうとしているものがそのようであったように指をつかい、そのようであったように息をして、そのようであったように脚をそろえ、そのようであったように瞬きをした。でも、それのかたちをなぞっているつもりなのだけれど、そのひとが覚えているそれとぼくが覚えているそれとでは何かが違うらしい。

だけど、それはもうないのだ。ぼくらが知るの、ぼくらの目にうつったその外形にすぎない。

暗い森に鎖された家で、薄暮とも暁とも知れぬ燭火のまたたきに濡れながら、そのひとはぼくを見つめてくる。

ここにあるものは虚飾である。

いくら豪奢に飾りつけたところで、いくらその似姿を握り締めたとして、ここにあるものは本物ではない。だけど、そのひとの目が醒めないでいるかぎり、ぼくという装飾は本物なのだ。

だが、そのひとのことをほんとうに想っているのならば、ぼくはこう問いかけてあげるべきなのだろう。

「虚飾と成り果てる覚悟が、あなたにはありますか？」

SS本編→『道化と偽王』

幻想短編集詳細頁 <http://nanos.jp/leithbhrogan/page/62/>

架空ストア様(委託通販) <https://store.retro-biz.com/il3593.html>

気持ち太極拳・織維街文化堂内【読書と映画。】様 <箱: D-31>

<http://kimochitaikyokuken.blog.jp/>

薄く割られた竹が交差して、格子をつくり、籠となる。子猫であればすりぬけられそうな大きさの網目は、六角形の羅列の隙間を小さな三角形が埋めているようでもあり、星型が連なっているようでもある。ぼくの手の内にある竹の籠は、目も荒く、歪んでいて不恰好だったけれど、遠くから眺めれば手鞠のように見えたのかもしれない。事実、初めてには上出来じやないかなとぼくを誉めてくれた叔父は、叔父の家から草に侵食されつつある畑の先にある川への道のりにおいて、ぼくの作品たる竹籠を、ボールのように放り投げれば捕まえるということを繰り返していた。

喧せるような草いきれを、風が散らす。暑さをもとせず、草は地を埋め尽くさんばかりに繁茂する。草を踏み固めて道をつくりながら前を歩く叔父が、一瞬だけ、よぎった暗がりに沈む。麦藁帽子のふちを持ちあげて空を見上げると、潤んでいるようでも乾いているようでもある空の天蓋を、悠然と、鷹が旋回していた。

叔父の拓いてくれた道を通って歩を進めていくと、草の香に土の香が混ざってくる。それらに水の香が混ざり始める頃、ぼくの耳は水音を掬った。

叔父の家は山間にあつた。水田が輝く集落よりも山深いところで、その家だけが、竹林の中にひっそりと佇んでいた。瓦屋根の平屋で、座敷蔵のある、畳みの部屋と板廊下の組み合わせでできている、広い家だ。竹藪と山とに呑まれているといつても過言ではないその家に、叔父はひとり住んでいた。亀の甲羅が土塊になつたかのような山を背に佇む叔父の家は、川によって水田や集落と隔てられていた。普段は叔父しか使わないからなのか、その川には、頼りない細い橋が架けられていた。欄干や柵といったものがなく、なんとかが擦れ違うことのできる程度の幅の、打ち付けた木の板を連ねて足場になっているような橋のはるか下に、草の隙間を縫って流れる水のきらめきがあつた。細い川ではあつても、上流に近いかからそれなりに流れは急だ。もつと壮大であれば渓谷と呼んでもよかつたのかもしれないが、せいぜいが谷川といったところだった。

「大雨が降ったりすると、昔はよく氾濫して、この橋なんか流されてしまったものだよ」

以前、橋の上にはしゃがみこんで川を覗きこんでいたぼくに、そんなことを叔父は教えてくれた。高く跳ねた水飛沫が、真夏の鋭い陽光を弾いて、きらきらと輝いた。堤防そのものである正方形に穴のあいた正方形のコンクリートを、両手で竹籠を抱えているぼくは、注意深くおろていく。先行して川の流れに辿りついた叔父は、流れから点々と頭を出している小石の積み重なった島を跳ね伝いながら、川の深さをさぐっている。

空は青く、ぼくと叔父の影は川の底でゆらめいている。麦藁帽子をかぶつた子供の影と、眼鏡をかけている細長い大人の影。ふたつの影は、輪郭こそ水の流れによってさざめいてはいたけれど、それでも、くつきりとしていて、黒く、濃い。

澄んだ流れに、一步、踏みこむ。足首までが、水に沈む。ぼくは素足にサンダルといった格好だったが、濡れることを気にかける必要はない。川の水は冷たかつたけれど、ぬるくはないほどの冷たさであり、肌をくすぐって過ぎ去る感触は、冬のそれと違って、暑さによってやわらいでいる。

川の流れの中をうろろろしていたぼくは、膝のあたりまで水かさのある場所に辿り着き、叔父を呼ぶべく背後を振り仰いだ。気がつけば、ぼくはずいぶん下流に来てしまっていたらしい。上流に、小さく、ぼくの動きに気づいて大きく手を振ってくれている叔父と、頭上高く谷川に架かかっている橋が見えた。

ぼくが竹籠を使って何をしようとしているのかといえば、夏休みの宿題だ。そこになぜ叔父がかかわっているのかといえば、はなしの流れであつたと言うほかはない。

叔父はぼくの母の弟だ。近くに住んでいるわけではないのだけれど、通勤で使う駅がぼくの家になつたから、時折、お土産を持参して遊びに来ていた。叔父は何かを調べたり分析したりしている人であるらしい。母が扱いに困るような珍しい品を楽しげに持つてくる叔父は、暮らしていくのに必要かどうかはわからないようなことをよく知っている、面白い人だった。ある時、ぼくの家遊びに来ていた叔父は、夏休みの宿題に何をしたらよいのか迷っていたぼくに、手を差し伸べてみることにしたらしい。らしい、というのには、叔父と母の雑談によりそれが決定されたのであり、その場にぼくはいなかったからだ。ともあれ、ぼくが困っていたことに変わりはない。問題が解決される糸口を提示されたとなれば、纏ってみたくなるものだ。よつて、ぼくは叔父の家に泊まりに行くことになり、叔父が現在のめりこんでいるという竹籠づくりに付き合ひ、工作ついでに自由研究まで終わらせてしまおう、という話になつていく。

ぼくが手にしている竹籠は、蛇籠という。もつとも、不恰好であるし、そのように名乗らせるには気がひける代物ではある。そのことはわきに置くとして、一般に蛇籠というものがどのような使い方をされるかという、急流に水に沈めて流れの速さをやわらげるために用いられる。ぼくが自由研究として取り上げようとしていることは、蛇籠を沈める前後では流れはどう変わるのかということだつた。

抱えてきた籠を川底に沈めてみる。川面に籠の底を触れさせる。竹の網目に押された水面は、網目の周囲に盛り上がる。籠を押し返してくる抵抗がなくなつたことで、ぼくは頭から川につっこみかけた。水飛沫を撒き散らしながら、なんとか体勢を整える。水に呑みこまれた竹籠は押さえられている間は川底に留まっていたけれど、案の定、手を離すと浮いてきた。流されかけた竹籠を慌てて捕まえて、再度、川底に沈める。肘のあたりを、川面が滑っていく。流れていく水というものは、思いのほか、くすぐつたい。川底の小石を見繕ひ、重石として網目から中に入れた。ぼくの拳くらいの大きさであれば、角度によっては、網目から差し入れることができる。石が小さすぎると水が竹籠から押し流してしまうから、陽光の網がゆらめく川底を、反射する光の眩さに目を眇めつつ、注意深くさぐる。黒い影が、水底にたゆたう光の網を塗り潰した。

面をあげると、沈めた竹籠を覗きこみながら、叔父が立っていた。

「どうかな。流れ、ゆるくなつた？」

ぼくは腰を伸ばし、ぐるりと周囲を見回す。竹籠を沈めた前後で、何がどう変わったのか。一瞥したところで変化を感じ取れるほど、ぼくの観察眼は鋭くない。だから、素直に答える。

「わからない」

「じゃあ、それを知るには、何がわかればいいのか？」

叔父はいつだつて穏やかだ。焦つたり動揺したりすることはよくあるけれど、突然不機嫌になつたり声を荒らげたりといったことはない。今も楽しげに微笑んでいる。

思考の糸口をつかめずに黙りこむぼくが、なんとか結論らしきものを手にするまで、叔父は辛抱強く待つてくれる。

「籠を沈める前と、籠を沈めた後で、流れの速さに違いがあるかどうかを比べてみる」

考えながら、考えていることを、訥々と音にする。整然と並べられている言葉とは程遠いそれを叔父は丁寧に拾い、並べ替え、咀嚼してくれたようだった。叔父がほくに問いかける。

「それを知るにはどうすればいいと思う？」

「川に、何か、流してみろ。同じ場所から流し始めて、籠を越してから、同じ場所で、通り過ぎたところで時間を計る。かかった時間を比べる。流れる速度が変わったのなら、籠だけが条件として違うのなら、それで比べられるはず」

「では、笹船でもつくって比べてみようか。それに、腕時計を貸してあげよう。合図してくれば、僕が流すよ。君は時間を計るといい」

「どのくらい流したのか。距離、わかると、いいかもしれない。その方が、宿題、まとまりそう」

「それはいいね」

「こやかに頷いていた叔父の顔が曇った。

「巻尺でも持ってきていけばよかったのだけれど。気が回らなかったなあ」

叔父を責めたわけではないし、そもそもほくが気づくべきだった。だから、叔父が気に病むことはない。そのことを伝えようとしたけれど、叔父の方がほくよりも先に口を開いてしまった。

「今日は印をつけておいて、あとで距離を測りに来ようか」

「ホイップクリームのような入道雲が、ほどなく夕立が到来するであろうことを告げていた。

かくして、笹舟で遊ぶことに夢中になっていたほくと叔父は、夕立に降られ、びしょ濡れとなって叔父の家に戻った。

叔父の家には内蔵がある。台所で一緒に夕食を作っていた叔父から、蔵の窓を閉めてきて欲しいと頼まれた。

「天気がよかったから、窓を開けて風を通して、ついでに虫干しもしていたんだけれどね」

カレーを煮込んでいる鍋をかき混ぜながら、叔父は曖昧な笑みを漂わせた。

「すっかり忘れていたんだ。夕立の雨が吹き込んでいなければいいのだけれど」

廊下を抜けて内蔵に向かう。歩を踏み出す毎に蒸し暑さが薄れていき、裸足の足裏に伝わる板張りの熱が冷えていく。涼しさが増すことに比例するように、廊下に満ちる薄暗さが増していく。

微風に足首を撫でられた。雨の重みをふくんだ風は、水の流れのようにほくの肌を纏わりつき、抜けていく。風上に眼を遣ると、蔵の引き戸が開いていた。

蔵の口である漆喰の扉はいつも開かれていた。だから、実質的には、曇り硝子を嵌めこんだ引き戸が、廊下と蔵の境目だ。夕暮れの茜よりも暗く日暮れの黄金よりは赤い光が、引き戸の空隙から、仄暗い廊下に射していた。覗き込んでみると、真正面に裏の竹藪が見える。遮るものなく竹林が見えるということは、窓は全開だ。中に足を踏み入れる。廊下の板張り蔵座敷の畳をつないでいる黒塗りの境は、もしかすると踏んではいけないものなのかもしれないけれど、ひやりとしていて気持ちよかったです。

両の壁際には埃避けの布を被った何かやお茶の銘柄が賑やかな木箱などが積まれていたけれど、扉から窓へと進むほくの道筋を途切れさせるものは、窓辺に置かれたテーブルだけだった。テーブルの上には標本箱やよくわからないものが並べられている。叔父が虫干ししていたのはこのことらしい。乾きかけてはいるけれど、点々と濡れているところがある。わずかではあるが、雨粒が吹き込んでしまったようだ。

せせらぎのような葉のざわつきとともに、竹と竹のぶつかりあう音が連鎖して、残響が重なっていく。夕立のもたらした雨粒の重みで換んだのか、夕立とともに吹き流れた風がしなせられたのか、傾いでいた竹が元に戻つたらしい。遅れてきた夕立のように水滴を落としながら香る竹藪も、静止の裡に木箱の積み重なる座敷蔵も、夜の青に傾きはじめている光のせい、そこにあるはずの輪郭はことごとく霞んでしまつて、薄れているようだ。

「雨戸を閉め、窓を閉め、鍵をかける。電灯を点けることを忘れてしまつていたら、淡くはあつても光のあることに慣れていた視界は、一瞬、真っ暗になった。眩暈のようなぐらつきを覚えて、立ちすくむ。

「陽を遮るか」

落日と宵闇のあわいに聞こえてきた声は、なんだかとても不機嫌そうだった。

『沈め石』(続)

(幻想短編集「人魚のかたり」収録予定)

(実際の文章は推敲等により変化する場合があります)

(二〇一七年五月六日 コミュニティA-二〇 No.11-b)

いつともしないそのとき  
どこともしないその土地  
水辺にたゆたう幻想物語群

## 人魚のかたり

hitosaka no katari

幻想時評集part3  
The book of Waterside  
絵と文 南風野さきは

2018年発行予定

片足靴屋/Sheagh sidhe  
<http://nanos.jp/leithbhrogan/page/69/>



## 片足靴屋/Sheagh sidhe 2017

<http://p.booklog.jp/book/119060>

著者：片足靴屋/Sheagh sidhe

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/leithbhrogan/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/119060>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト